



染付をする山本博史さん。生地裏側には、竹がアーチ状に渡してある。

その線は染まらないようにする。のりは、冬と夏で違うものを使う。固さの違い、自分の手の温度も作用し、絞る量

のりが乾いたら、染付にかかる。染料の調査は、見本の色と合わせるために、電子天秤で1000分の1グラムまで

細かく粉末を計量する。「見本は、長年の使用で、色落ちしていることがあ

祭礼用品を復元制作する 伝統の手染め技法

地域の宝を、もう一度新しく

日本各地に伝承される獅子舞などの祭り。そこに使われる胴幕(カヤ)や半天、幕などを、山本染業では、伝統の染め技術で、復元制作している。

「まず、見本を見せてもらい、忠実に再現するのが基本です」と、三代目になる山本博史さんは、話す。

見本とは、これまで使っていた現物のこと。縫い合わせなどで模様があ

「歴史都市 高岡」 文化を守り伝える技

国宝や重要文化財をはじめ、町並みや祭りなど、有形・無形の文化財を今に受け継ぐまち、高岡。歴史的資産や先人たちの技を次代に伝えるために、さまざまな保存修理が行われている。現場では、棟梁から弟子へ、父から子へ、再生の技もまた継承されている。

重要文化財 勝興寺 保存修理技術

当時のものがあるという価値

高岡市伏木にある勝興寺は、約五四〇年前に創建され、長く近代まで権勢をふるった浄土真宗の大寺院である。平成10年から行われている「平成の大修理」も第II期。大広間、式台などが解体修理されている。

「修理の仕方は、1棟ごと全部違う。基本は、建築当初材をできるだけ残すこと。そこに、腐心しています」と、棟梁の田中健太郎さんは語る。

「当初の材料があることで、当時の時代背景、もの考え方使用された道具、その時の気候まですべてわかる。それだけ多くの情報があるため価値のあるものなんです。だから、1ミリでも長く残すようにしています」

勝興寺には、接木や埋木、矧木などが多い。材料を大切に使用して建てた、建立当時の大工たちの思いが感じられる。「埋木ひとつでも、ベテランの大工が、若い大工が、その仕事をした職人が見えるんです。だから、寺を見ていると、自分には何百人の大工がいるように見えてくる」

「勝興寺を建てたときの、人々の思いを感じることが大事なんです」

自分で考えるから応用できる

田中さんのもとには、3人の若手が働いている。しかし、弟子に直接教えたことはない。見本を見せ、「これと同じものをつくれ」というだけだ。「学校の教育とは違うんです。自分で、どうつくればいいのか一生涯懸命考える。『できました』と持ってきて、違っていたら、『あかん』としか言わない」

最初からすべて教えれば、早くつくれるが、その親方流のつくり方しか伝わらないし、応用がきかない。「ヒントは、周りにいっぱいある。自分で考えてつくるから、次に違ってものをつくれと言ったときに、早くでき

るんですよ」

田中さんの育てた弟子は、技能五輪全国大会に出場し、入賞するほどの実力を身に付けている。

また、太い丸太を、当時の宮大工と同じ道具で何日もかけて挽かせ、昔の時間を体感させることも行っている。

仕事にのぞむ心構えを学ぶ

弟子の一人、舟木聡史さんは、高校の時から文化財の修理をしたいと思ひ、勝興寺の模型もつくったという。

「今は、200年から300年の歴史を持つ建物を、大工として携わることが喜びです」と話す。

「棟梁から学んでいるのは、仕事にのぞむ心構えです。棟梁は、ひとつのものを作るにも、全力で思いを込めて作るんです」と、瞳を輝かせる。

棟梁は、言葉では伝えない。熱い姿勢を弟子に見せるだけだ。田中さんには、昔の大工たちと、現在の大工たちが重なって見えるという。田中さんと弟子たちの仕事も、また勝興寺の歴史のひとつとして刻まれていく。気の遠くなるような過去と現代の技が、ここで交差している。大修理の完成は、平成30年春の予定だ。

染めには、刷毛や筆を使って、ぼかしも行う。山本さんの長男で、四代目となる剛士さんは、「父のぼかしは、きれいですね。レベルが違う」と話す。やがて、一枚の大きな白い布に、鮮やかな絵が完成する。

父の技術を100%学びたい

「染料が乾いたら、下地を染める『押し』などをした後、色止めをして水洗い、最後に縫製となる。」「染め上がった段階で3〜5%縮むんですよ。模様が合わなくなる。それを合わせるのが、技です」と、父の博史さんは言う。

これだけの工程を、気温や湿度などを考慮しながら進めていく。しかも、祭りは日が決まっているので、遅れるわけにはいかない。

剛士さんは、「祭りに行くと、自分たちがつくったものを着ている人を見ると、幸せを感じます」と言う。一度は、他の仕事に就いたものの、伝統の手染めがなくなるのは寂しいことだと思ひ、継ぐことを決意した。「今は、父の持っている技術を100%学びたい。知識も100%吸収したい」と意欲を示す。博史さんは、「続けていくことが、まず大事。厳しいこともあるが、いろいろな経験をしていくことですね」と話す。祭りには、地域の誇りがあり、祭礼品にもこだわりがある。山本さん親子の制作した品が、祭りの晴れやかさを高め、また代々受け継がれていく。



写真右／勝興寺保存修理第II期工事の様子。勝興寺は、文明3年(1471)に、本願寺8世蓮如の2男蓮乗が砺波郡蟹谷(現在の南砺市)に設けた土山御坊が始まりである。戦国時代には一向一揆の拠点となり、天正12年(1584)に現在の伏木に移った。前田家などの結び付きを深め、明治に至るまで大きな勢力を誇った。約3万平方メートルの広大な境内には、西本願寺に模して建てられた本堂をはじめ12棟の建造物が重要文化財に指定されている。このほか高岡には、開町の祖である前田利長公の菩提寺「瑞龍寺」があり、国の重要文化財に指定されている。昭和60年から平成8年にかけて大修理が行われ、平成9年、仏殿、法堂、山門が国宝に指定された。

勝興寺ホームページ/ <http://www.shoukouji.jp/>

奥の壁に掛けてあるのが「見本」。のり置きした生地を上上げて乾かしている。

工房の壁には、刷毛が掛けられている。色の名前が付けられ、色見本のようにになっている。

のり置きをする山本剛士さん(31歳)。のりの固さを確かめ、一気に描いていく。

「復元は、目加減手加減の仕事」と話す父の山本博史さん。

